

平成 21 年 8 月

露草の耳を澄ませてゐるやうな
梅雨晴のアパート干せるだけ干して
釣針の太し巨大鯰を釣るつもり
掌に載せて同じ重さの柿ばかり
手の窪や鶏頭の種集まれる
てのひらの錠剤白く春立てり
手花火の滓に穢れし今朝の庭
手花火の滓に穢れし今朝の庭
てぶくろをさかさに読んでたたかれる
天界の冬物一掃春の雪
天井のオスのネズミも嫁が君
天道虫転倒虫となり逃る
天に召されし風船の一目散
登校の子ら一列に悴める
逃亡の意思のあきらか手の蟬は
どう見ても檻褻干されゐる若布
透明水彩うんと薄めて薫風描く
道路情報の早口言葉日短

何処がちがふのぬるかんと温め酒
途中から…聖歌の歌詞知らず
途中からメモ帳となる日記買ふ
突然死逃れて老衰ゴム風船
どの位置の蝌蚪ミの蝌蚪を押しつける
どの蝌蚪も全身でいやいやをして
トビウオと高速船の競争だ
鳥の声するどく山を笑はせる
ドリンク剤ごくごく飲んで春の風邪
ドレミファの長短光る軒氷柱
内心の怒り秋扇の閉じ方に
ナイフに従順林檎の皮するる